

鑑賞における教材の提示方法が学習活動に与える影響

佐藤和貴（東北生活文化大学短期大学部）

目的

鑑賞では主体的に音楽を聴く姿勢が必要である。各校種の音楽科の授業では、鑑賞の学習に必要な内容が体系的に示されており、高等学校までには音楽を形づくっている様々な要素を理解でき、音楽の文化等と関連づけて鑑賞する力を身につけることが期待されている。しかし、実際は高校生でも楽曲を聴いてただ「良い曲だった」といった感想の記述で終わってしまう生徒も少なくなく、学習指導要領で示された視点を持って鑑賞できる高校生は多くないことが問題であった。

そこで本研究では、鑑賞における教材の提示方法を比較、工夫することで、より良い生徒の主体的な聴取を促すことができないかと考えた。教材の提示方法が生徒の学習にどのような影響があるかを検証し、その検証結果を主体的な聴取を促す授業構成に生かすことを目的とする。

結果

検証の結果、①教師の実演を通して鑑賞を行なったクラスは、技法や奏法、奏法のやり方と技法がもたらす音色に着目して記述している生徒が多く、②CDによる鑑賞を行なったクラスは、音楽の場面の移り変わり、全体的な雰囲気や感じについて書いている生徒が多かった。このことから、①教師の実演を通じた鑑賞では、実際の演奏技法と聴取を同時に体験できることで、技法や奏法と音色の関わりを焦点化してより深く学ぶことができると考える。また、②CDによる鑑賞では、音楽全体を俯瞰して聴き取ることで、音楽の有機的な結びつきを意識した聴取に効果があることがわかった。本研究を通して、鑑賞における楽曲の視点により、教材の提示方法を工夫することが必要であることが示唆された。

方法

本研究では高等学校芸術科「音楽Ⅰ」鑑賞として、「リストのピアノ曲を味わおう」という題材名で授業実践を行なった。楽曲の提示方法を①教師の実演、②CDの2つの方法を用いて、同学年の異なるクラスに授業を行ない、生徒の楽曲に対する聴き取り方をワークシート（批評文）の記述内容の比較から検証を行なった。

[授業概要]

(1)実践対象:I 高等学校

(2)実践内容

実践①教師の実演…1年1、2組（男子9名、女子10名）令和2年2月8日授業者：著者

実践②CD…1年3、4、5組（男子13名、女子19名）令和2年2月17日授業者：I高等学校T非常勤講師

内容

1. 指導概要

○教材 リスト作曲 《パガニーニ大練習曲》から第3曲〈ラ・カンパネッラ〉(教育芸術社 MOUSA1)

○題材の目標

(1)リストの人物像や楽曲の特徴に関心を持ち、主体的に鑑賞する。（主体的に学習に取り組む態度）

(2)ピアノによる様々な演奏技法を理解し、技法の違いによる音色の変化を味わう。（知識・技能）

(3)リストのピアノ作品の特徴や音楽的な効果を思いや意図を持って表現する。（思考・判断・表現）

○題材について

(1)生徒の実態

・音楽は好きだが、クラシック音楽には興味を持たないという生徒も多い。

・ピアノの多様な性能を駆使して表現されるクラシック作品には触れることが少なく、ピアノ音楽の魅力を深く味わった経験のある生徒は少ない。

(2)題材について

・本題材は、学習指導要領の「B鑑賞(1)鑑賞ア(ア)、イ(ア)(イ)」を扱う。

・本題材では、リスト作曲 《パガニーニ大練習曲》第3曲〈ラ・カンパネッラ〉を教材に、ピアノの超絶技巧を用いた作曲技法の魅力に迫る。

・リストの人物像を通して、超絶技巧を要する作品の魅力を感じ取り、ピアノの多彩な表現を味わうことで、ピアノ音楽の魅力の本質に迫りたいと考える。

(3)指導観

・第1時では、風刺画の鑑賞やリストのピアノ作品の聴取を通して、リストの人物像について学び、リストの作品の特徴を感じ取る。

・第2時（本時）では、リストの人物像を踏まえ、リストのピアノ曲の様々な表現、演奏方法について学習していく。

・本教材は、1つの旋律をピアノの多彩な表現を活

かして様々に形を変えて演奏される変奏曲として作曲されている。それぞれの変奏が、どのような作曲技法で演奏されていくのかを考察し、多彩な音色の変化による豊かな音楽表現を感じ取らせたい。

・指導にあたっては、学習指導要領〔共通事項〕(1)イを扱う。ピアノのさまざまな演奏技術に関する知識を学んだ上で、そこから生まれる音楽を形作っている要素と音楽における働きを関連させて鑑賞できるように配慮する。

2. 生徒のワークシート(批評文)の記述(抜粋) (1)①教師の実演を通じた鑑賞

・跳躍、ペダル、トリル、オクターブの4つの演奏技法が最高の音色を奏しており、曲調は暗め、不気味で不思議な雰囲気を持つ曲。

・全体的に音が暗く、4つの技法で演奏されており、それぞれに音色やリズムや強弱などの特徴がある。特にトリルは細かいリズムが特徴である。また、オクターブでは力強い音が演奏から聴いてとても伝わってくる。

・変奏曲形式で作られていて同じような旋律のフレーズで構成されていて、跳躍、ペダル、トリル、オクターブなどのさまざまな技法が含まれていて、難易度がとても高い曲。

・さまざまな技法を使っていてとても迫力があつた。特に跳躍やオクターブがすごいと思った。演奏技法のトリルを使うところが印象に残った。

・音の高いトリルが印象に残りやすい。メロディーとなる部分はペダルを使い、音を伸ばしている。オクターブでやることで音の強さがまし、力強い演奏になっている。

・ペダルを踏んで音がのびたかたがすごいゆったりして、伸びがあつて流れている。れんぶも止まらず流れている。

・勉強した4つの演奏技法がわかりやすく使われていると感じました。私が一番好きだったのはトリルです。跳躍とトリルをしているところが好きだったからです。

(2)②CDを通じた鑑賞

・一つだけの演奏技法を使うのではなく、たくさんの技法を使った曲。小節ごとに変化があるから聴いていてあきの来ない楽曲ではないかと。

・多くの演奏技法を使って様々な雰囲気を出している曲です。

・様々な音楽の要素(音色・リズム・強弱など)を変えながら変化させていく楽曲。

・最初の、あまり技法などをつけていない時は、一つ一つの音ははっきりしていて、中間の方から技法などが増えてくると忙しい感じに聴こえる曲です。

・いろんな音が混ざっていて、きれいかつこい曲。

・演奏技術を変えて、さまざまな雰囲気を出すことができる曲。

・スキップをしているようなリズムや、眠くなりそうな音色、そして悲しさも感じるように、さまざまな感情を抱けるような曲。

・1つのメロディーをいろんな工夫をまじえて弾くラ・カンパネラは楽しみ方がたくさんあると思った。強弱だけじゃなくはやさやおそさなどたくさんの事が出ていた。

・明るい感じから暗い感じに変わる曲。たくさんの工夫があつて聴いていて面白い。

・早くなったり、高くなつては低くなったり、細かいリズムを刻んではのびのびとしたリズムになったり、とても忙しくて激しい曲です。

3. 考察

(1)①教師の実演を通じた鑑賞

視覚的な技法の情報と生の音色をリアルタイムで感じ取ることができ、特定の技法のもたらす音色や技術的表現が生徒の印象に残りやすい、感じ取りやすいと考えられるのではないかと考える。

(2)②CDによる鑑賞の方

曲全体を俯瞰して聴く傾向があり、曲全体の雰囲気を漠然と、全体像として捉えている傾向があるのではないかと考える。

参考文献

久保田慶一(2019)『新しい音楽鑑賞 知識から体験へ』水曜社
文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説音楽編(平成29年度告示)』

文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領(平成30年度告示)解説芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』

付記

本研究の授業実践に協力してくださった、元I高等学校非常勤講師の丹野聡子先生に感謝申し上げます。

本研究は、東北生活文化大学東北生活文化大学短期大学部研究倫理委員会の承諾を得て実施している。